

☆ テ ー マ ☆

在宅医療を
理解するために
～実践に活かす～

申請者名 小田 絹代
所 属 特定非営利活動法人校舎のない学校
職 名 事務局員
所属所在地 岐阜県揖斐郡池田町本郷 1531-1
電話番号 0585-45-9745
提出年月日 平成 22 年 8 月 28 日

事業報告目次

- ・はじめに
- ・ケアマネジャーが抱える現状の課題
- ・本事業を取り組む理由
- ・本事業を取り組む目的
- ・研究方法
- ・期間
- ・結果、効果
- ・次回の課題にむけて
- ・終わりに

はじめに

誰もが、豊かに安心して在宅で暮らし続けられる事を願っている。

しかし、万一、自分自身が介護を受ける立場になった時、住み慣れた在宅で生活が可能か？介護保険制度は十分に使えるか？蓄えは大丈夫か？等、誰もが少なからず不安を感じているのではないかと思う。

そうであっても、遠慮せず相談でき、十分にサポートしてもらえる安心感がある事によって、悲観せず、絶望的になることなく、豊かな気持ちで老後を迎えられるのではないかと思う。その重要な役割を担うのが、ケアマネジャーという専門職である。

その人の生き方をコーディネートするといっても過言ではないケアマネジャーとサービスを提供する役割の専門職の人たちが、障がいをもって「在宅で暮らし続けるために」という思いを真剣に理解し、在宅での医療サービスを有効に活用する意識をもっているか否かで、将来の暮らしは大きく変わってくるだろう。

今回、セミナーを企画したことによって、ケアマネジャーが抱える現状の課題がみえ、それぞれの思いに差はあっても、共有しあい、確認することができれば、一人一人が、僅かながらでも前進できることがわかってきた。

今後、ケアマネジャーが専門的役割をいかに発揮する為には、医療職、介護職と十分な連携をとりながら、生活を視点においた介護を基本に、自立支援のケアプランが作成できることで、在宅での生活がより可能になり、継続していけるのではないかと考える。

(ケアマネジャーが抱える現状の課題)：

対象：在宅で医療を必要とする要介護者を担当をしているケアマネジャーにむけて「もし、医療関与の必要な重度の利用者を担当することになった場合」を中心にヒアリングした。

- ・利用者の状態にかかわらず、退院を余儀なくされた相談は、準備に不安がある
- ・基礎資格の違いによってケアプランの立て方の差を感じる
 - 在宅生活を支えられるサービスの種類の組み合わせの差
 - 医療系、介護系の得意分野、不得意分野があるのではないか
- ・経験年数に関係なく医療の知識が必要とされる
- ・利用者の重度症状により、受け入れを判断してしまう
- ・医師との知識(専門的分野)に臆してしまう
- ・医師と壁がある感じがする
- ・医師に対して自分からハードルを高くしてしまう
- ・医師とは、どうしても上下関係になりがち、一歩引いてしまう
- ・医師とは話しにくい
- ・医師より看護師との方が連携しやすい
- ・終末期の対応が難しい
- ・情報交換できる場が欲しい
- ・担当者会議で本来の役割を果たしているかどうか自問自答する時がある
- ・事業所の規模や職場の環境にもよるが、教育システムがないのではないか

(本事業を取り組む理由)

全体面から：

ケアマネジャーの多くは、利用者の家族に面接し、ケアプランを立案しているが、その内容において、家族の意向に添ったプランになり易い傾向は否めない。そこで、在宅で住み続けたいとする利用者側の視点をおき、人が、豊かに自分らしく、住み慣れた家で安心して暮らし続けるために、何が必要か？何をしたらいいのか等を、地域から・生活から・人から、五感をとおして、体験から学びながら、「生きる」ことについて学ぶ機会として取り組んだ。

ケアマネジャー自身：

人の生活を支えること、人格を尊重することを基本に、主体を利用者とすることで、個別の生き方、ニーズを全面に受けとめ、医療を始めとする専門職と対等に連携しながら、介護に参加し、共に質を高めていく。

また、家族の介護力も評価できるようになること、能力も大いに活用できるようになるため、家族に課題解決にむけて取り組めるようにしていくことに努めた。

(本事業を取り組む目的)

- ☆医療サービスを必要としている利用者の対応に困らないために
- ☆医療を巻き込んだ介護を考えられるようになるために
- ☆利用者の思いに寄り添い、プランを組むために
- ☆医療職との壁を作らず、連携の中心となり、積極的に連携を行うために
- ☆社会的使命、専門職としての責任、プロとしての意識がもてるために

(研究方法)

- テーマについて・・・NPO法人理事である医療職・介護専門職とテーマを検討。会員である現役介護支援専門員・医師から聞き取りを行い、現状分析と内容検討を行った。
- 具体的に考えたこと
 - ☆一方的な講義で伝えるばかりでなく、参加形にすることで、ケアマネジャーの本音ができるようにする＝セミナー方式、グループワークを行う。
 - ☆ケアマネジャー自身が何を重点に考えるか気づくための講師として＝医療・看護・介護・生活療法士のあらゆる専門職へ依頼する。
 - ☆伝えたいことを明確にするための内容について＝現場からの事例を出すことで「在宅医療を理解する」ことにつなぐ。
 - ☆講義内容の検証のために＝法人の定例会内で発表してもらい、講師とコミュニケーションをはかりながら、テーマを共有し、内容検討を行う。
 - ☆テキストからでなくすべて実践をありのままに出し、思いの共有をはかり、課題の解決に役立てる。

(期 間)

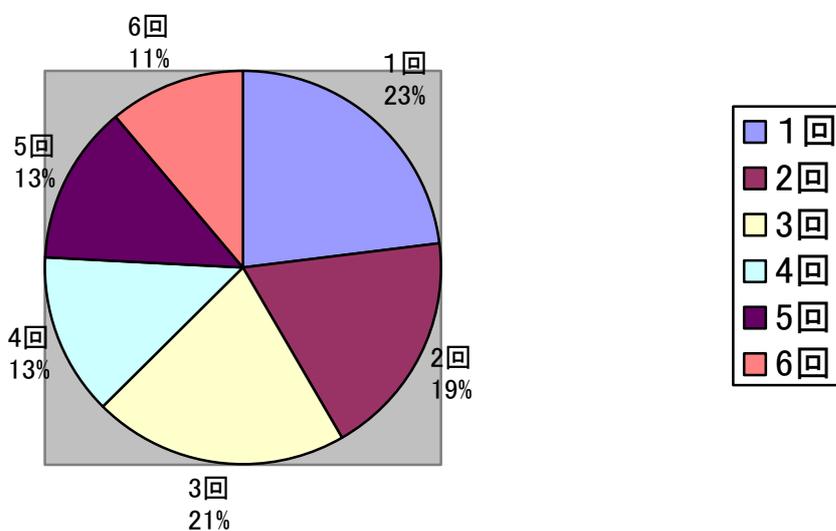
- セミナー前の検討：平成 21 年 8 月～平成 22 年 2 月
- セミナー実施：平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月
- セミナー後振り返りと今後の打ち合わせ：平成 21 年 10 月～平成 22 年 8 月

(プログラム)

	日程	講師	申込者	参加者	テーマ
1回	10/12	医師	42	33	重度化する在宅医療の現状と基礎知識
2回	11/12	介護支援専門員	39	27	医療依存度の高い利用者のケアプラン
3回	12/12	看護師/生活療法士	51	30	医療依存度の高い利用者の訪問看護・訪問リハビリテーション
4回	1/13	介護支援専門員	49	19	医療依存度の高い利用者のプラン PDC A サイクル
5回	2/13	ケアマネジメントセンター管理者	46	19	アセスメント入所・在宅ターミナルケア
6回	3/13	介護支援専門員	43	16	医療職の連携とチームづくり
合 計			270	144	

※テーマ別延参加者数

参加回数：全6回 1人、4回 3人、3回 3人、2回 7人、1回 130人



(結果)：セミナー終了後の参加者感想から

- ・ケアマネジャーが感じていること（乗り越えたいと思っている）ことが、講義によって共有できた
- ・誰のために何をするかを常に問いかけた仕事がしたいと強く思った
- ・利用者の思いを限りなくかなえるためのチームづくり、ネットワークを広げていくことが大切だと思った

- ・訪問看護師の思いが分かり、チームが組みたいと思った
- ・医療職との連携のためには、自ら、情報発信する必要があることがわかった
- ・利用者のQOL向上のために、多職種サービス連携の必要性がわかった

：講義中の受講生アンケートから

- ☆医療職と本音で話し合えているか
- ☆ コミュニケーションがとれているか
- ☆在宅医療の理解がどこまでされているか（サービス活用の意識があるか）
- ☆ケアマネジャーが働く環境はどうか
 - ＝事業所によって複数のケアマネジャーが配置されていない場合、1人で悩みながら、対応することしかできないのではないか
- ☆ケアマネジャー自身が壁をつくっていないか
- ☆100万円ケアプラン（夢あるプラン）がたてられるか
 - ＝人の思いより介護保険の限度を先に考えてしまうのは、なぜか？
- ☆医療と対等な連携のために何が必要か
- ☆多職種との連携のためには
- ☆専門性＝ケアマネジャーの質が向上するために
- ☆果たす役割ができているか
- ☆在宅医療が、その人の生き方を支えることへの理解が少しできた
- ☆在宅で支える限界を頭にいれておくことも必要

（次回の課題にむけて）

- ・ケアプランの立て方（単純、パターン化）になっていないか
 - 個々の生活歴は違うはず、その人の生活を支えていることになっているかの気づき
- ・在宅医療はいつから活用したらよいのか
 - 重度になってからで間に合うのか
- ・医療と連携するためには、何をしたらよいのか、何から始めればよいのか
 - 社会資源等を有効に活用するには

(終わりに)

その人の人生を支える役割を担っているケアマネジャーの質を上げていくことが、在宅でその人らしく豊かに暮らし続けることを可能にするものであることはいうまでもない。

質をあげることの一つに、在宅の各サービスが利用者、家族、サービス提供者共に安心であることが求められ、その安心とは医療サポートの有無で大きく左右される。80%の日本人が最期を病院で迎えている現状の中、最期を迎える時、白い部屋の中で天井を見続けながら、管につながれている状態が、満足な一生であったか、思い残すことはなかったと思えるだろうか？

在宅で医療行為が受けられる環境は、これから整備されていくと思われるが、まず、自分がどうしたいかを主張でき、受け止め、思いを可能にしていくチームによって‘終わりよければすべてよし’といきたいものである。

そのために、今、すべきことを考えて対処していきたい。

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による

(研修) セミナーを終えての感想

助成申請を、法人理事長からと会員からの情報で知るまでは、この「在宅医療」に特化した研修の存在すら知らなかったことを、反省している。

今、前期の助成報告を終え、何よりも、参加者の感想から、実施できてよかったと感じている。

1つには、ケアマネジャーの専門職としての意識啓蒙につながったことが大きかった事は、言うまでもない。

また、在宅医療について、身近に感じていくことで、苦手意識から脱却できれば、ケアマネジャーの質の向上にもつながっていくだろう。

ただ、1人でも多くのケアマネジャーにセミナーを受講してもらいたかったが、さまざまな事情によって、参加が減っていったことは、残念に思う。

テーマについても、医療に関することについては、断然、求められており、ニーズもあったのを感じているが、開催日、開催期間、開催時間等に工夫が必要かもしれない。現在、後期スケジュールの見直しを行っている最中である。

将来の安心が、在宅医療の理解を深めること、医療との連携をすすめていくことで、得られる事が可能になっていくとしたら、このテーマは、いろいろな職種で取り組まれ、もっと頻繁に開催されていくべきではないかと思う。ケアマネジャーや専門職全員が知ることが、当然になっていけばと思っている。